奇岩 セタカムイ 伝説

せたかむい
古平町役場総務課
☎42-2181（代表）
平成19年4月1日

『せたかむい』について

平成元年に創刊した『せたかむい』ですが、町外の方や新しく町内に越して来られた方から、その名称のことで「せたかむい？　ってなんですか。どんな意味なんですか」という質問をよく受けます。

『せたかむい』というのは、沖町の海岸に屹立する、天に向かって突き出たような形をしている岩の名称です。正しくはセタカムイとかたかなで表記しますが、その岩のイメージから『せたかむい』とひらがなで書いて標題にしています。

古平のほぼ北に位置する丸山岬とその南に位置するセタカムイ岩が相対して、大きな弧を描く天然の良港・古平湾を抱しています。

その名前からして語源はアイヌ語とわかりますが、セタ＝犬・カムイ＝神という意味ですから、「犬の形をした神さま」とでも言うのでしょうか。

古平は北海道でも早くから開けた町ですが、意外と伝説とか民話というものが伝わっていません。セタカムイについても同工異曲というか伝説が二、三ありますが、その中で『北の語り』―口承文芸資料集（昭和六〇年）―に載ったものを紹介します。

◇　◇　◇

昔、ラルマキ（現在の沖町）に一人の酋長が住んでいた。

このラルマキに流れる川には鮭、鱒、アメマス、ヤマメなどたくさんの魚がいた。酋長は川でこれらの魚をとり、山ではけものをとって食料とし生活していた。

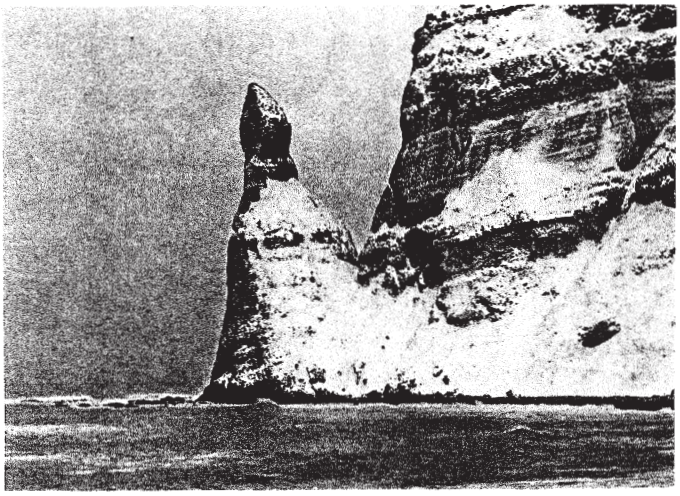
ある日のこと、この酋長が川に魚をとりに行くと、ふだんあまり見かけたことのない魚が泳いでいるのを見つけ、早速ヤスでこれを突き、ほかの魚といっしょに持ち帰った。

家に帰ると炉の側で串に刺し、ほかの魚と一緒に焚き火で焼き始めた。炉のそばでは三毛猫が一匹うずくまって、魚の焼く煙を体に浴びながら、臭いに鼻をうごめかしていた。

また土間には、白のアイヌ犬がこれも鼻をうごめかし、ジーッと魚を見つめていた。

一串、一串と焼きおえると、串を抜いて側のざるに並べ、また焼き始めるのだった。

「ジューッ、ジューッ……」と魚の脂が垂れ落ちると煙を上げ、その臭いも一段と強くなるのだった。すると、今までじっと様子を見ていた三毛猫がいたたまれなくなったと見えて、その辺をうろつき始めた。これを見ていたアイヌ犬も、土間を右往左往し始めた。ざるの中の焼けた魚の山がだんだん高くなると、猫



年表で読む古平の歴史

［116］

商工業 ④

商業

古平市街（浜町・港町・新地町　入舟町・丸山町）

開拓時代は商店を開く者があったが、多くは入港の和船より貨物を受けてこれを委託販売するに止まり、呉服、反物、小物類は専ら行商による。明治一〇年以降、呉服、荒物、小間物や雑貨商が相次いで開店し、商業やや繁盛す。今は主なる商品は小樽や府県より仕入れ、これを美国、積丹の各商店や行商に卸し、小売としては郡内の各町村、余市郡沖村の一部に供給している。積丹半島で商業の最も盛んな地である。物価は小樽に比較して一割から一割五分高く、ことに荒物類は二割以上の高値にして、やや高すぎる感がある。海産物は入港の加賀、越中の和船に直接売り込み、また小樽商人の手を経て、古平港から直接四日市、大阪などに輸出する。商人の中に

◆後志国状況報文

明治三二年、河野常吉の報告文に、古平郡の商業の状況について次ぎのように述べている。

沖村

酒菓子類の小売商一戸あり、村民の日用品は古平市街に仰ぐ

沢江村

酒菓子煙草類の小売商四、五戸あり、村民の日用品は古平市街に至りて購求す

群来村

酒菓子類の需要品は古平市街に仰ぐ、村内には小売商が一戸あるのみ。

や犬の動きも激しくなった。

突然、猫が入り口めがけて突っ走った。酋長もあっけにとられていると、犬がその後を追って外に飛び出して行った。よく見ると猫の口には、あの珍しい魚がくわえられていた。

酋長も「三毛猫のヤツめ、あの魚を狙っていたのか。帰って来たらとっちめてやる」と、ひとりごとを言いながら、焼いた魚をざるのまま吊るした。

いっぽう三毛猫を追ったアイヌ犬の白は、逃げる三毛猫をどこまでも追い続けるのだった。猫はとうとうセタカムイ岬の下まで逃げて来たが、もう逃げるところはないと、けわしい崖を登り始めた。しかし、口にくわえた魚だけははなさなかった。

ここまで追って来た白は、崖下で激しく吠えたが、なお逃げる猫を見ると歯をむき出し、後を追って崖を登り出した。

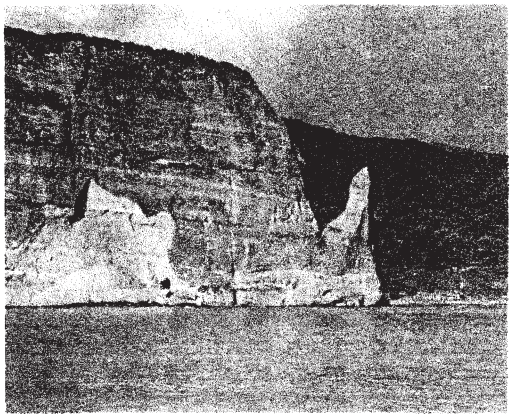
だが猫の身軽さにはかなわず、三毛猫は姿をくらましてしまった。追うのをやめ、白は降りようとしたが体が思うように動かず、崖の途中でじりじりしていた。

こんなことをしている中に夕暮れになり、夜になったが白はまだ中途にじっとしているだけだった。

やがて朝日が辺りを照らし始めたが、白はもとのところにいた。悲しい声を出しながら必死に降りようとしているが、ついに力尽きてその場で命を落としてしまった。

夕日が沈み、翌朝、その場所に行くともう白の姿はなく、今までなかった岩が忽然と現れ、その付近の様子は一変していた。

皆は、これはあの白犬の化身だと言い、それからこの岬をセタカムイ岬、突き出た岩をセタカムイ岩と呼んでいる。



← 余市側から眺めたセタカムイ

は一万円以上の資本を運転する者五、六戸ある。（以下 表など略）

◆市街地図に見る商店

明治三五年四月一日、古平郡に二級町制が施行され、町内の五町四村が合併して古平町となり、浜町・新地町・港町には商店が軒を並べ市街地を形作った。その市街地明細地図に商店名などを書き入れ、裏面の広告欄には次ぎの商店名が記載されている。

市街地図広告に見る商店

業種名	住所	屋号	氏名
銀行	新地町	株式会社小樽銀行古平支店	
銘酒千代桜醸造元	同	△	鎌田金蔵
海産・回漕・漁業	港町	⊗	小町商店（安右衛門）
米穀・荒物・海産商	新地町	正	藤澤勇蔵
待春医院	同		院長 劉三郎
待春医院出診所	新開町		右同
呉服商	浜町	本	高野常吉
海産・米穀・荒物商	同	本	支店 高野平治
倉庫業・荒物・海産商	新地町	∴	渡辺宗作商店
肥料・米穀、荒物商	入舟町	㋐	今井平五郎
古平病院	浜町		院長宮地金吾
古平病院出診所	新地町		右同
和洋裁縫店	同	与	田中鉄五郎
和漢洋薬品・各国売薬	同		回生堂 竹内厚
和洋薬種・洋酒・紙類	港町		杏春堂 山田喜作
米穀・海陸物産・網類一式	新地町	セ	山崎清治
海陸物産・回漕業	港町	△	渡辺喜代太郎
海陸物産・回漕・旅人宿	同	今	岩井茂平
鮮魚・乾物・海陸物産仲買商	新地町	仁	林廣吉
荒物・漁具・金物商	浜町	三	高野名石蔵
米穀・荒物・海陸物産商	同	※	長島米造
米穀・和洋酒・缶詰・荒物商	新地町	力	梅野角蔵
荒物・缶詰・煙草・小間物商	入舟町	中	金子忠平
漁業	同	△	墓目善次郎
同	同	イ	山口金治
同	同	種金	種田銀作
漁業	同	斉	斉藤兼太郎
旅館業	新地町		津田清兵衛
林檎育苗栽培・販売	浜町	寒松園	石井豊太郎
和洋小間物・味噌醤油醸造	新地町	泉	泉勇吉
銘酒清泉醸造元	浜町	本	本間禮太郎
海陸物産商	港町	目	幾井旧七
呉服太物商	同	五	佐野吾市
米穀・荒物・海陸物産商	同	大	瀧原宗四郎
肝油製造・金物商	同	◇	中村榮太郎
肝油製造・醤油醸造	同	〇	寿原要太郎
呉服太物商	新地町	イ	広谷商店（三郎）
陶漆器硝子・荒物商	同	中	仲谷松太郎
料理店	同		小原新蔵
柾製造・屋根業	浜町	や	下野弥次郎
漁業	沢江村	〇	松尾市太郎
同	歌棄村	長	崎野はな
同	同		八反田寅吉
近藤病院	丸山町		院長近藤清吉
近藤病院出診所	新開町		右同
漁業	沢江村	仲	仲谷末太郎
料理店	新地町	盛	村井隈太郎
漁業	沖村	三八	田岸貞治
菓子商	新地町	松月堂	大沢凌八

漁業	沖村 ㊀	米田惣太郎
同	沢江村 △	仲谷勇治郎
米穀・荒物・海陸物産商	浜町 ㊁	松井栄五郎
神仏彫刻師	同	田中龍北
菓子製造・湯屋業	新地町 ㊐	佐藤長八
乾物・荒物・菓子・果物販売	同 北	斉藤六三
米穀・荒物・海陸物産商	同 本	本間愛蔵
米穀・荒物商	浜町	早瀬又兵衛
料理店	新地町 回	田鎖鶴治
海陸物産・米穀・荒物商	浜町 ㊇	名達文吉
菓子商	浜町 朝日堂	田畑忠八
料理店	新地町 ㊙	今井松太郎
旅館業	同 舎	中川幸太郎
漁業	沖村 ※	米田末作
農業	浜町 晴耕園	関口利勝
劇場	新地町 土谷座	土谷久太郎
劇場	浜町 共同土谷座	頭取土谷久太郎

◆度量衡の販売と検査

明治八年（一八七五）尺貫法度量衡が公布され、物差し・秤（はかり）・枡（ます）の販売業者は指定され、官庁から下げ渡しを受け販売していた。

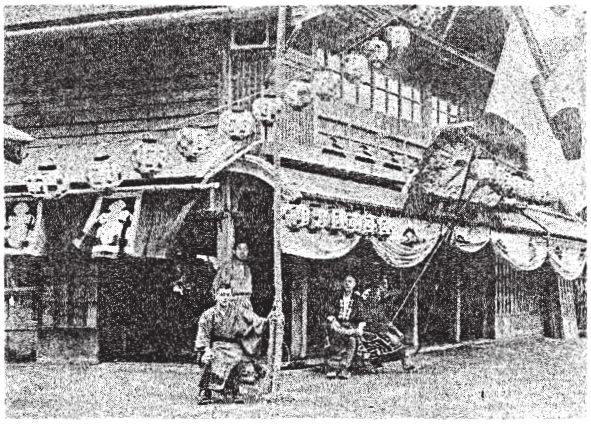
明治一三年、札幌本庁工業御局度量衡係御中として、戸長宮崎彦八名で提出した「度量衡御下渡願」の書類はあるが、誰が販売していたかは不明である。

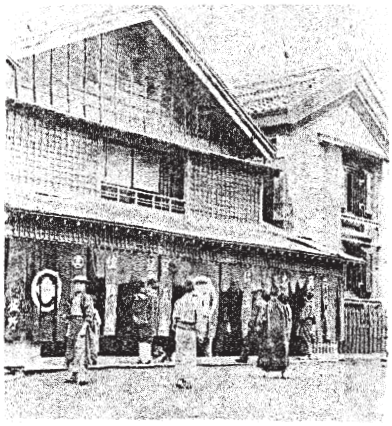
明治一八年、日本は国際メートル条約に加盟し、明治二四年（一八九一）、メートル法を基礎とする度量衡法が公布された。

度量衡三器の販売は、浜町高野名石蔵に引き継がれたが、古平ではなお尺貫法の度量衡が販売されていた。

大正一〇年（一九二一）度量衡の改正により、官庁や学校ではメートル法が実施された。しかし、長年の商取引きの習慣から、なお町内の商店など一般の生活では尺貫法が使われていた。

大正五年、商店や漁家、農家など物品の販売に度量衡を使用するところでは、度量衡の検査が行なわれるようになった。この年は一八九戸、八九一点について検査したが内七八点が不合格となり、修復を命じられた。





→本　高野呉服店の売出し風景
↑新地町　五　佐野呉一呉服店
←店内の様子と外観

高野名幸作さんの日記から
当時の世相を見る
〈123〉

大正十四年
～続き

▼一二月四日
今日も朝から風が激しく海は大時化だ。タコ縄支度で、縄の客で忙しい。夜、若林さんと㊥へ遊びに行きいろいろ話した。

▼一二月五日
起床七時、今日はようやく快晴、丸太積みの船が入港し馬車屋連は港町へ運搬している。熊さんは農園へ囲いに行く。私は午後から銀行行き、のち㊥長太郎入営につき祝いに行く。父はセリがあるというので買い物に行く。若林主人、積丹へ陸行された。夜、丸山観音電灯の件につき禅源寺へ集まり協議す。不許可になったので善後策を協議し一〇時帰る。よい夜だ。久し振りで余市通いが出る。

▼一二月六日
起床七時、今日はまた風が激しく時化、よく荒れるものだ。余市通いもダメだ。町中は少しも雪が無く道路はカラカラ、こんなに雪の無いことも珍しい。

▼一二月七日
起床七時、町へ出て見れば二、三軒が国旗を立てている。今日は入営兵の入隊日かと思っていたら、皇孫殿下ご安産の吉報があったとか、おめでたいことだ。全国民の喜びも如何ばかりか。東京辺りではきっと賑やかなことならん。入営兵は九時役場前を出発、私も新地の波止場まで見送る。祝いのぼりや国旗を立て勇ましく出発した。珍しい好天気、道路もカラカラ、これなら自転車でもよい、十二月中にこんなことも珍しい。

▼一二月八日
起床七時、丸太積みもこの天気続きで一生懸命荷役している。保木から熊さんと網を運搬する。目下の相場は十円八十銭、白米（一俵＝六〇キロ）一六円五〇銭、スルメ一〇〇斤（六〇キロ）二五円、綿糸二八五円、刺網五〇掛一〇円五〇銭、タコ縄支度で店はこのところずっと忙しい。

▼一二月九日
起床七時、浜へ出てみる、丸太積み船は今日もナギなので浜中から積み込んでいる。イカダにして発動機船で引いている。人夫一〇〇人余りも出てなかなか忙しい。このナギに積み込まねばまた荒れるかもしれぬ。一二月というのに珍しい暖かさだ。

▼一二月一〇日
起床七時、暖かい日だ、寒暖計は四八度F（約九度C）まで上がる。子供らはパッチ遊びをしていてなかなか賑やかだ。四郎までも真似をしてやる。正治も妻も壮健で肥立ちが良い。丸太積みも一生懸命だ。夜、㊥末司さんの通夜に行く。この辺りは道路の悪いこと甚だしい。

▼一二月一一日
起床七時、昨夜来の雨は今朝になり風を交えて雪となった。起きて見たら一夜で真白くなっている。海も時化だ。熊さんは㊥の葬式の手伝いに行く。午後から私も葬式送りに行く。雨と雪で道路の悪いこと甚だしい。

▼一二月一二日
起床七時、今朝は雪が三寸も積もっている、いよいよ根雪らしい。カレ網漁ポツポツある、タコ縄漁は最初はずいぶん意気込みがよかったが、それ程の漁がないとのことだ。夜、港町の鍛冶屋老婆の通夜に行く。雪が降り寒さが厳しい。

▼一二月一三日
起床七時、昨夜来の雪、今日は五寸ほども積る。これで根雪だろう、寒さも厳しく寒中のようだ。港町須貝鍛冶屋の葬式送りに行く、時々吹雪く。皇孫殿下の命名、照宮成子内親王

▼一二月一四日
起床七時、雪は降らず天気もよく海はナギてきた、小樽通いの共栄丸が入港する。午後から大分暖気になり雨が降り出す。道

路がまたグシャグシャとなった。夜、新地町渡辺宗作さんが死亡し通夜に行き、八時に帰る。幸治は今日から十九日まで二学期の試験があり、二〇日から正月休みとのこと。

▼一二月十五日

今日は祝聖会の例会日、前回は四時頃行ったら一番だったが、今日は五時半に出かけた。六人目でちょうどこれから読経が始まるところだった。読経後は例によって和尚の部屋でいろいろ話し、八時帰る。新地町渡辺主人の葬式送りに行く。丸山観音の電灯の件、一七日に点灯式をやるとのこと。

▼一二月一六日

昨夜来の暖気も今日は吹雪きとなる。雪は三寸も積もっている。吹雪きのため往来も少なく冬ごもりらしくなった。早く板戸を閉める。

▼一二月一七日

起床七時、昨夜来の雪、今朝起きて見れば一尺以上も積もる大雪、熊さんは早くから雪投げの大仕事だ。私も洗面早々手伝いをする。どこの家でも皆雪投げで戦争のようだ。一日中少しも休まず降る。午後一時、役場へ営業税調べで税務署員が来るというので行く。昨年は二万二千円のところ、二万四千円とのことだ。私は昨年より少なくしてもらいたいところなので、承知せず帰る。午後四時、丸山観音点灯式があるので行く。五時から観音経をあげ、六時に帰ったが大吹雪となる。

▼一二月一八日

起床七時半、今年は雪が降らん降らんと言っていたが、四、五日前から急に大雪になり、今朝は五寸以上も積もり、今日までで二尺以上にもなる。今日も一日中降り続いた。寒さも一段と厳しく、朝二八度F（零下二・二度C）、日中でも三二度（〇度C）、ガラスは白く凍りつき、漬物樽にも氷が張る。私と熊さんで裏の漬物樽を倉に入れる。相良さんの五歳の女児、一五日から出血が甚だしく、今日二時の外浜丸で小樽へ行く、妻が見送りする。ところが七時頃、余市で死亡したとの通知がある。可哀想なことだ。人間いつどんなことがあるか分らない。今日から店のコタツをかける。

▼一二月一九日

起床七時、毎日毎日雪が降り昨年よりかえって雪が多くなった。今日も雪が積もる。命日で和尚さんが来られる。妻は支度で忙しい。私は相良伊之さんの子供の死亡のお悔やみに行く。正午に余市からの船で戻るというので波止場まで出迎えに行く、本当に可哀想なことをした。店は綿糸、キウリ糸などがポツポツ売れる。タコ縄はこの頃の漁況が思わしからず、活気がなくなった。そろそろカレ網にかかる。夜、伊之さんのところの通夜に行く。九時に帰ったが雪もようやく止んで静かになり、星も見えた。幸治も試験が終ったので、明日は帰って来るだろう。

▼一二月二〇日

起床七時、静かなよい天気になった。寒さは相変わらず厳しい。幸治は午前の船で来るかと思っていたが来なかった。妻は一時に伊之さんの子供の葬式送りに行く。幸治は三時の富丸で来る。子供らが揃って迎えに行く。壮健でこうして居られるのは何よりの幸せだ。家でも家内揃って無事なのは何よりの幸福なことだ。子供らは人形、刀、食パンなどのお土産に一同大喜びだ。夜、伊之さんの忌中引きによばれて行く。八時に終ったが、帰途太に寄り、金さんと三人で話し一〇時半帰る。静かなよい夜だ。

▼一二月二一日

起床七時、いよいよ年末になった。熊さんは煙突掃除やらすすぱらいなどやる。私は岡崎へ幸治がお年玉を貰ったお礼やら、年末の帳簿整理などする。午前中は快晴で久し振りに小樽から発動機船も来たが、午後からにわかに吹雪きになる。冬の天気はあてにならぬ。幸治も昨日帰って来てよかった。年末になり何かと心せわしい。夜になると吹雪きはますます甚だしく、板戸を早く閉めた。熊さんは神棚の掃除をやる。

▼一二月二二日

起床七時、昨夜来の降雨があり道路の雪も少し消える。熊さんは屋根の雪下ろしをやる、ずいぶん積もっている。二五日朝か

ら餅つきをすることにした。困、傘、平、熊さんと私のところの五軒分だ。目下、白米一俵一六円二〇銭、もち米一俵一七円八〇銭

▼一二月二三日

起床七時、吹雪きで大時化になった。朝食後、沢江方面まで行ったが道路まで波がかかっている。○、川畑の辺りでは大勢が出て防備に一生懸命だ。ヨ重久さん、今日札幌から帰るつもりのところ、この時化で帰られぬ。午前中子供らが学校へ行くと、あとは悦三、四郎、ナツの三人だが賑やかだ。幸治も相手になって遊んでいる。午後から傘さん、ソイさんらが来て米をとぐ。暖かい日だったが夜になって雪が降り、一〇時頃外を見たら五寸も積もっている。風が止んで波の音も静かになったようだ。

▼一二月二四日

昨日来の吹雪、今日も一日中荒れて沖は休みだ。年末になり鮮魚の値段のよい時にナギがなくては困る。ヨの重久さん、これだと今日も帰れぬだろう。幸治は予定どおり帰れてよかった。明日三時から餅つきをやるので熊さんはその支度に忙しい。傘さんは今晩泊まる。マユ玉の木を大渕さんから買って来る。子供らは大喜びだ。夜、支店の湯に久し振りによばれて行く。妻、コノさんらは明朝の支度で忙しい。長く荒れた天気も夜に入り静かになりナギてきたようだ。

▼一二月二五日

今日は餅つきだ、昨晩から傘さんは泊り、午前二時頃から熊さん、傘さんらが支度にかかり、間もなく古島さん、金子誠一さん、鎌田さん、坂下さんらも来て、午前四時頃から搗き始める。ペッタン、ペッタンの音を聞いて、五時頃には悦三、四郎らも起きて来て、賑やかな餅つきを見て喜んでいる。女の手も田、困おつかさん、京さんらが来て、七時頃にはマユ玉もつけた。いろいろな飾り物を下げてきれいになり、子供らもそれを見て大喜びだ。私も久し振りに三うす程搗いたがなかなかゆるくない。今日は曇り空のせいかずいぶんと暗い。餅搗きは暑いので、裸になったりガラス戸を開けたりしてやっている。後片付けをして六時過ぎ全く終った。天気もようやく戻ったようだ。

▼一二月二六日

起床七時、昨日は餅つきの大役も終りよかった。今日は餅切りや後片付けをする。久し振りに青空が見える好天気で海も上ナギ、漁船も出た。小樽通いの発動機船も来た。私は年末の目録書きをやる。午後、幸治は丹さんから買った白米一〇俵分の代金を払いに行く、一俵一五円四〇銭で今の相場より一円は安い。午後三時頃、コノさんが急に産気づいたので皆大慌て。六時半頃になって無事男子を出産した。先ずはひと安心、今日は今までになく暖かい日であった。

▼一二月二七日

起床七時、昨日は熊さん一家が家移りして安産、重ね重ねめでたい。今朝は熊さんもコノさんも居らぬので、妻は五時頃から起きてご飯炊きやらで忙しい。私も板戸を開け庭掃きをやる。珍しく天気快晴、春先のような青空で雪も幾分消える。裏の洗濯物もよく乾いたようだ。熊さんは新宅に移ったので何かと忙しいようだ。私は月末の目録書きや、餅切りなどで忙しい。子供らは学校が休みなので皆家に居るので賑やかなこと、幸治やトミは時々熊さんの家へ遊びに行っている。

▼一二月二八日

起床七時、熊さんとコノさんが新宅に移ったので、妻はご飯炊きや子供のことでなかなかゆるくない。産後も順調なので何よりだ。私も雨戸開けから庭掃除、その他で朝のうちは忙しい。体を動かしている方が体のクスリになる。今日は亡き母の命日で和尚さんが来られる。母が逝きて早満五年になる、在世中の厚き慈しみは終生忘れることはできない。慈愛深き母であった。もっと長生きさせたかったと思う。歳暮の品を配るのに文治もあちこち用足しする。小学校は今日から休み、通知簿をもらって来る。文治は全部甲、トミは乙が一つ、吉治は二つあったが割合良い。夜、餅切り、終ってからカマボコ焼きをする。暖気で雪も消え雨だれの音がする。

▼一二月二九日

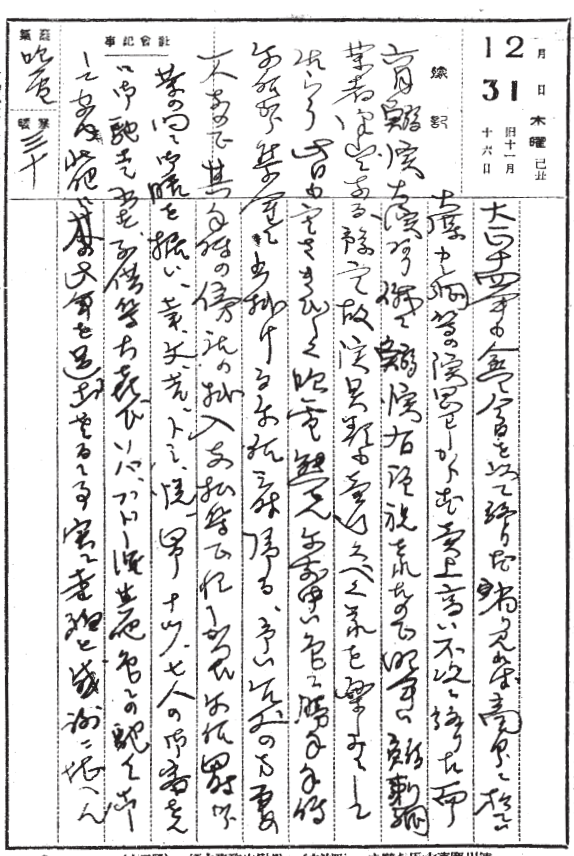
起床六時半、この頃は朝の仕事で朝食前の運動になる。熊さん九時頃来て、沖村、沢江方面へ集金に行き正午帰る。午後は新地方面へ行き、合計一八〇円ほど集金す。五月の残金はなかなか入金がない。カレ網漁今日まで四ナギほどあったそうだが、値段はカレ一枡一八、九円と昨年の三倍ぐらいで、漁師連はなかなか元気がよい。この後も大漁であることを祈る。私は四郎を連れて熊さんの家へ行く。コノさん五日目だが肥立ちも良く元気だ。家も広く勝手のよい家だ。

▼一二月三〇日

起床七時、昨夜来また大吹雪となり、寒気も厳しくまるで寒中のようだ。家の方も手不足で妻は多忙だ。熊さんは雪かきの後集金に出かける。大吹雪にこの寒気で、家の中に居ても顔がピリピリするようだ。散髪に行って来たが、店の方も客や入金やらでなかなか忙しい。午後から神仏や床の間などにお供餅を上げ、松飾りなどして正月らしくなった。夜は台所では煮豆、なます、その他いろいろと支度で忙しい。子供らはカルタ取りなどをして遊んでいる。早正月が来たようだ。夜に入り吹雪はますます甚だしい。

▼一二月三一日

大正一四年もいよいよ今日をもって終りだ。省みれば商品においては大謀、カレ網などの漁は思わしからず、にわかにイワシ漁があり有望視されたので、明年はイワシ刺網業者が多くなると思われるので、漁具類も売れるべくそれを楽しみにしていよう。今日も寒さが厳しく吹雪、熊さん午前中はいろいろと勝手の手伝い、午後から集金に出かけ三時頃帰る。私は台所の方が妻一人で大変なので、その手伝いかたがた、店の方の入金や支払いなどで忙しかった。午後四時から茶の間にお膳を据え、幸、文、吉、トシ、悦、四郎、ナツ、七人のお客さんへご馳走を出す。子供らは大喜び、ソバ、ブドー酒、その他いろいろのご馳走を出して、家内壮健でこの年を過ごせること、実に幸福と感謝にたえない。



【日記の原文】

12 月 31 日　木曜 巳丑　旧十一月十六日

大正十四年も愈々今日を以って終りだ、省り見れば商品ニ於てハ大謀カレ網等の漁思己しからず売上高ハ不況ニ終りた、而し六月鰯漁大漁阿り俄ニ鰯漁有望視されたので明年ハ鰯刺網業者沢山なる豫定故漁具類も売行久べ久それを楽しみニして居ろう、此日も寒さきびし久吹雪、熊さん午前中ハ色々勝手手伝、午后から集金ニ出掛ける、午后三時帰る、予は台処の方妻一人なので其手伝の傍店の掛入支払等で忙しかった、午后四時から茶の間ニ御膳を据い、幸、文、吉、トシ、悦、四郎、ナツ、七人の御客さんに御馳走出す、子供等大喜び、ソバ、ブドー酒、其他色々の馳走出しして家内壮健に此年を過古さるゝ事実ニ幸福と感謝に堪へん

地方自治の移り変わり
―蝦夷地から北海道へ―

継続して来た『地方自治の移り変わり』は、今回、古平町会議員・古平町議会議員選挙の経緯について掲載の予定でしたが、ちょうど第一六回古平町議会議員選挙がありますのでこれは次回にします。

代えて明治四年の「廃藩置県」からの市町村合併（明治と昭和の大合併）の概要と、小樽市をふくむ後志管内の町村合併の経過を載せることにしました。

北海道は他府県に較べて歴史が浅いので、明治三五年以降、北海道に町村制が施行されたときからの、現在の後志支庁管内と小樽市の経過をまとめましたが、現在の小樽市と管内一九町村の成立した経過もなかなか込み入った複雑なものがあります。

■市町村合併

全国的には平成の大合併といわれる大きな動きは一段落したようですが、今後に向けていぜん活発な論議が行なわれております。

平成一五年、北後志五町村任意合併協議会が発足して、各町村を持ち回りで協議が行なわれましたが合意が得られないまま、当初の目標であった、平成一七年三月末までの合併申請を目指していた法定協議会の設立を見送りました。

法律によって定められた法定協議会は合併の可否について正式に協議する場ですので、これによって古平町を含めた町村合併は立ち消えということになります。

その後、新らしい構想でさらに広域での町村合併へ向けての協議が進められているのが現状です。

先の合併協議会が開かれるとき、五町村では合併についてのアンケートをとっていますが、古平町の結果はどうだったのでしょう。

二〇歳以上、三千七百余人のうち回答者は三千二百人余り（回収率八七・二％）で、賛成四五・二％、反対二一・二％、どちらとも言えない三一・七％でした。今後はすでに合併を終えた市町村の状況なども考慮しながら、地域の実情を見つめ、危機的な財政事情に直面している古平町の在り方を選択することになります。

■藩が府・県となる

明治四年、歴史に出てくる「版籍奉還」＝藩主が土地と領民を朝廷に返すことを願い出て、藩主は知事に任命された＝が行なわれ、全国の二六一の藩がなくなって、東京・京都・大阪の三府と三〇二県となった。

しかし、この三〇二県という数は何としても多過ぎるし、県といっても郡よりも小さい県もあり、また藩主が県知事となった藩の中には、財政難から藩をなくしてほしいと願い出る知事が相次ぐ状況だった。

そこで、それまでの藩を廃止して府と県に改め、藩知事に代わって政府から府知事、県令が任命された。これによって、政府の地方に対する権力は一段と強まっていった。

その後、府県の統廃合が行なわれて、三府七二県となり、明治時代は府県の統廃合と共に市町村の合併が盛んに行なわれた。

■都道府県の移り変わり

明治四年（一八七一）六月　三府　四五県　二六一藩
同年七月・廃藩置県三府三〇六県
同年一二月　三府　七二県
明治五年一二月　三府　六九県
明治六～七年　三府　六〇県
明治八年　三府　五九県
明治九～一一年　三府　三五県
明治一二年　三府　三六県
明治一三年　三府　三七県
明治一四年　三府　三八県
明治一五年　三府　四一県
明治一六～一八年　三府　四四県
明治一九年　三府　四一県
明治二〇年　三府　四二県
明治二一年　三府　四三県
昭和一八年　一都二府四三県
昭和二一年（道府県制による）
一都一道二府四二県
昭和四七年　一都一道二府四三県

■市町村の移り変わり

明治二一年（一八八八）　七一、三一四町村

明治二二年（市制町村制施行）
　三九市一五八二〇町村
大正一一年
　九一市一二四二町一〇九八二村
昭和二二年（地方自治法施行）
昭和二八年（町村合併促進法）
　一八六市一九六六町七六一六村
昭和二九年
　四四四市一七九六町五八七八村
昭和三一年四月
　四九五市一八七〇町二三〇三村
同　年九月
　四九八市一九〇三町一五七四村
昭和三五年
　五五五市一九二二町一〇四九村
昭和四五年
　五六四市二〇二七町六八九村
昭和五五年
　六四六市一九九一町六一八村
平成二年
　六五五市二〇〇三町五八七村
平成七年
　六六三市一九九四町五七七村
平成8年
　六六六市一九九〇町五七六村
平成一一年
　六七一市一九九〇町五六八村
平成一八年
　七七七市　八四六町　一九八村

今までも国の政策として大きな合併が二度行なわれてきたが、明治二二年には市制と町村制の実施で強行されたもので、七万余りもあった町村が五分の一の一万五千余りにまで減少した。

もう一つは昭和二八年で、町村合併促進法が制定され、全国的に合併が進められた。その結果、一万近くもあった町村数は三分の一にまで減少し、また数町村が合併して市になるところが多くなり、逆に市の数は倍増した。

平成の大合併ではわずかだが市が増え、町村数は二、五五八町村から一、〇四四町村と、実に五九・二%も減少した。

北海道では、平成一一年三月、
　三四市一五四町二四村
平成一九年一月二九日現在、
　三五市一三〇町一五村
二一二市町村あったが一八〇市町村と、一五・一%の減少である。

※　昨年の総務省の統計によると、市町村の減少が五〇%以上の県が二〇県、二〇%以下が五都道府県、最も市町村の減少したのは広島県で七三・三%（八六市町村から二三市町村）、減少数の少ないのは東京都で二・五%（四〇市町村から三九市町村）二市が合併しただけです。

仮に北海道が広島県並に合併したとすれば五九市町村になり、一市町村の平均面積は約一、五〇〇平方キロメートルにもなります。これは古平町（一八六・八平方キロメートル）の約八倍の面積です。

大正一二年
後志支庁管内町村と小樽市

5．狩太村へ虻田郡弁辺村（現豊浦町）の一部が編入（大正14年）
6．前田村と発足村の分村は複雑なので併記して省略
7．小樽市の一部が札幌市西区へ編入（昭和48年）
8．石狩町の一部が小樽市へ編入（昭和50年）

浜中村（余市郡）―― 浜中町
山臼村（余市郡）―― 山臼町
沢　町（余市郡）
冨沢町（余市郡）
中　町（余市郡）
梅川町（余市郡）
琴平町（余市郡）
山田村（余市郡）
黒川村（余市郡）
畚部村（余市郡）
川　村（余市郡）―― 大川町
沖　村（余市郡）
―― 余市町

野塚村（積丹郡）
入舸村（積丹郡）
日司村（積丹郡）
出崎村（積丹郡）
―― 入舸村
余別村（積丹郡）
来岸村（積丹郡）
神岬村（積丹郡）
西河村（積丹郡）
―― 余別村
小泊村（積丹郡）
船澗村（積丹郡）
厚苫村（積丹郡）
幌武意村（積丹郡）
婦美村（積丹郡）
―― 美国町
―― 積丹町

浜中村（古平郡）―― 浜　町（明治12年）
垂美村（古平郡）―― 港　町（明治12年）
新地町（古平郡）――
丸山町（明治12年）
本　町（昭和31年）
―― 御崎町
入船町（古平郡）――
群来村（古平郡）―― 群来町
沖　村（古平郡）―― 沖　町
沢江村（古平郡）―― 沢江町
歌棄村（古平郡）―― 歌棄町
―― 古平町（明治35年・2級町村）―― 古平町（明治40年・1級町村）―― 古平町

（町内の村名は、昭和５０年１月１日すべて町に改正された）

備考　市町村の沿革を簡単な図で表すのは無理なところもあります。
省略したところもありますのでご承知の上ご覧ください。

1. 市町村名の変更や１・２級町村制施行の年度などは省略（古平町のみ記入）
2. 黒松内町⇨三和町のとき、寿都町との関係を省略
3. 原歌村の一部が瀬棚郡島歌村（現瀬棚町）へ編入（明治17年）
4. 喜茂別村へ有珠郡徳舜瞥村の（現大滝村）一部が編入（大正9年）

尻別村（磯谷郡）―― 南尻別村 ―― 蘭越町 ―――― 蘭越町

虻田郡虻田村より分村（現虻田町）
↓
倶知安村（虻田郡）―― 倶知安町 ―――― 倶知安町
　└― 東倶知安村 ―― 京極村 ―― 京極町

虻田郡虻田村より分村（現虻田町）
↓
真狩村（虻田郡）―― 真狩村 ―― 留寿都村 ―――― 留寿都村
　└― 真狩別村 ―― 真狩村 ―― 真狩村
　└― 喜茂別村 ―― 喜茂別町 ―― 喜茂別町
　└― 狩太村 ―― 狩太町 ―― ニセコ町

前田村（岩内郡）
梨野舞納村（岩内郡）
老古美村（岩内郡）
幌似村（岩内郡）
発足村（岩内郡）
小沢村（岩内郡）
―― 前田村
―― 発足村
―― 小沢村
―― 共和村 ―― 共和町

稲穂崎町（岩内郡）
御鉾町（岩内郡）
鷹台町（岩内郡）
橘　町（岩内郡）
堀江町（岩内郡）
吹上町（岩内郡）
三島町（岩内郡）
野束村（岩内郡）
敷島内村（岩内郡）
―― 岩内町
―― 島野村
―― 岩内町 ―― 岩内町

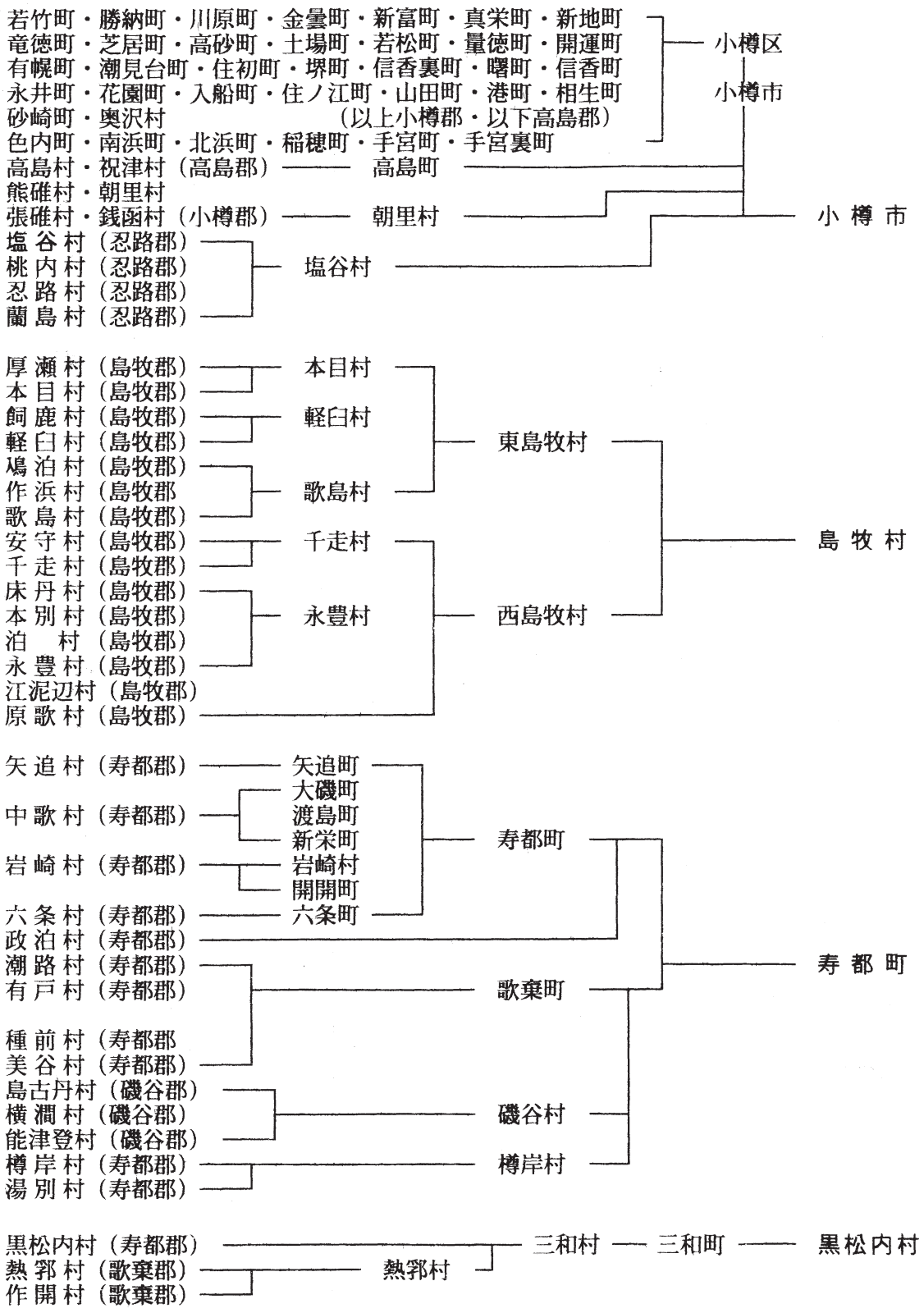
泊　村（古宇郡）
盃　村（古宇郡）
興志内村（古宇郡）
茅沼村（岩内郡）
臼別村（岩内郡）
渋井村 岩内郡）
堀株村（岩内郡）
―― 茅沼村
―― 堀株村
―― 泊　村

神恵内村（古宇郡）
赤石村（古宇郡）
珊内村（古宇郡）
―― 神恵内村 ―― 神恵内村

仁木村（余市郡）
山道村（余市郡）
大江村（余市郡）
―― 大江村 ―― 仁木町
―― 赤井川村 ―― 赤井川村

➡

小樽市・後志支庁管内の市町村合併の沿革



町内の学校探訪

新地小学校

新地小学校はこの方面の急激な人口増もあり、警察分署の建物を改築して、郡内で四校目の小学校として開校した。学校は現在の吉田商店と藤沢商店の間の小路を上がったところにあり、周囲には人家も多かった。

明治二一年、新地小学校として創立したが、三年後の明治二四年、郡内の学校のすべてが古平小学校分校となり、新地小学校はその後も分教場などと名称は変わったが、統合まで分校のままであった。

昭和二五年度は児童数が最多の三七一名を数え、統合時は一八二名であったが、全道一といわれる規模の分校であった。

統合後の校舎は改築されて古平高等学校の校舎とり、高校の道立移管後は放置されていたが、温泉の湧出によって建物はふるびら温泉として再生し、現在にいたっている。至っている。

◆地域の教育の始まり

新地、群来方面は丸山岬によって湾が形作られていて、鰊漁場として適していたので早くから人が集まり漁場が開かれていた。

定住する者も増えてきて、子供の教育についての要望もあったと思われるが、当時は新地町にあった禅源寺の住職天山和尚や、同じく漢方医熊谷昌庵らが、子供たちに読み書き、算盤を教えていたという。

さらに明治二年頃、沢江村の元伊達藩士だったという松岡直之助が、寺子屋を開設したと伝えられている。

明治五年八月、学制が定められ、翌六年、浜中に古平郡教育所が設置されたとある。

（北海道誌＝学校の部）

※古平郡内の教育所については、当時の札幌本庁古平出張所に関する文書もあり、『古平小学校』の項にゆずる

◆新地小学校創立

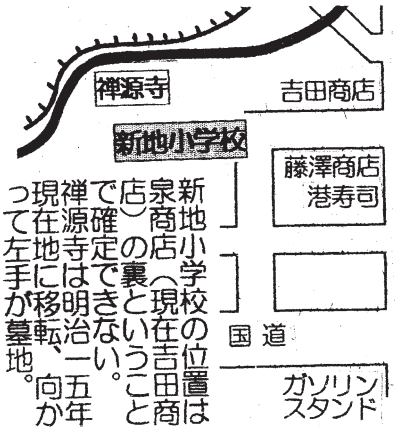
古平郡内に教育所が設立されたとはいうものの、なおこの地域では寺子屋式の教育が行なわれていたと考えられるが、その後、古平郡の公費によって教科書などが整備され、明治一三年、町民からの寄付によって浜中学校が新築された。

これにより新地方面の児童も浜中学校に通学することになったが、通学路のこともあり、住民からはこの地域にも学校を建設してほしいとの要望が強かった。

明治二〇年一〇月、浜中学校が校内からの出火で全焼し、簡易科三学級の児童は、倉庫などの建物を臨時校舎としてそれぞれ分散し授業が行なわれた。

※港町の道路の一部（建物の建っていない個所）に、道路の拡幅以前には、おとこ石・おんな石と呼ばれる大きな岩が二箇所突き出ていた。浜町側の通称・木工場と言われていた辺りまでは崖が張り出していて、その区間二五〇㍍ほどは崖の上に道路があった。

海が穏やかな時には歩行者は波打ち際を通ることもあったというが、荷馬車などは崖の上の道路を通っていた。明治三六年北海道庁拓殖課発行の古平郡内地図（五万分の一）を見ると崖の上に道路のあったことが分る。



← 新地小学校創立当時の位置

新地小学校の位置は泉商店（現在吉田商店）の裏ということで確定できない。禅源寺は明治一五年現在地に移転、向かって左手が墓地。

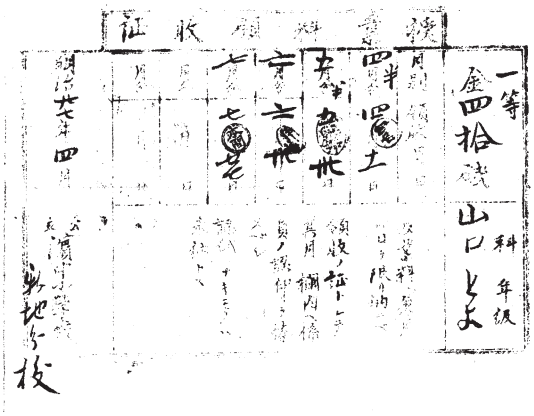
この火災を契機に明治二一年三月、新地町六番地にあった古平警察分署跡の建物一七二平方㍍（五二坪）を改築し、新地小学校が創設された。第一、二学年の二学級編成で、創立当時の児童数は不明であるが、七年後の明治二十七年の児童数一六二名とある。

学校の場所は新地町の商店街に近く、通称新地山の上と呼ばれるところで、明治一五年、禅源寺が現在地に移転するまで近くにあり、沢を上ったところには墓地があった。

また、通学路は港町から通している道路よりなく、泉商店脇の狭い私道を通る児童が多かったことから、泉商店（味噌・醤油の醸造業、古平で始めて洋品雑貨店を開く。一時教科書の販売をしていたというが不明）では通学する児童の便宜を図り、私費で道を改修して通学路とした。

新地小学校の開校により、古平郡内には古平小学校、沖小学校、沢江分校、翌年には群来分校と五校の学校が開校することになるが何れも海岸線沿いにあり、昭和に入って古平川沿いに鴨居木（明和）、稲倉石と小学校が新設された。

（この当時の新地小学校の資料はほとんど残されていない）



← 新地小学校授業料領収書

大正一二年一月、雪おろしをしていなかった運動場が倒壊し、幸い死傷者は出なかったが、町会で三上町長が陳謝し、ひとまずこの問題は解決した。

この町会では、群来小学校を廃止し新地分教場に統合の案が提出されたが、部落民の陳情もあり、今後三年間にその準備をすすめることとした。

また新地分教場は建築から相当年月を経過し腐朽しているので、新築しなければならないことが論議されたが、先の群来小学校との統合問題もあり、その移転の位置は新地町と群来村との中間にすることが適当と決定した。

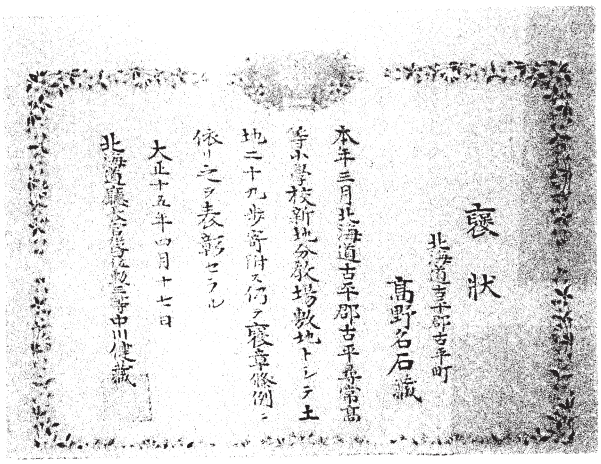
大正一二年八月、新地町九一番地に建設することになり、四、九四六平方㍍（一、四九六坪）を三、五〇〇円で買収し、二、六一五円で整地を始めたが、校舎の位置などから予定を変更することになった。

そして、藤澤勇蔵から四、七八七平方㍍（一、四四八坪）、高野常吉から六八四平方㍍（二〇七坪）、後に高野名石蔵から土地の寄付があり、その他の土地も買収して、新地町八九番地に校舎と隣接して屋外運動場の建設を始めた。

これらの整地には一、五五〇円を要した。

※ 高野名幸作日記に、「大正一三年一一月二二日 ＝ 新地山の上に畑地が三畝（九〇坪）あったが、大正五、六年頃、美国への道路開削のとき無断で七〇坪余りをとられ、その後残りを父に貸していた。昨年、新地分校ができるとき使用されていることが判明、米田助役に交渉したところ、役場の見落しなので相当価格で売ってもらいたいとのこと」

さらに後日の日記には、「学校のことなので、父が寄付してもいいというので寄付することにした」とある。



← 土地を寄付し褒状を受ける

〈続く〉

春爛漫

大澤文子

早朝から太陽がカッと照りつけると、あー北国にも漸く春が…と躍動感に心が疼く。

「今年の抱負は？」なんて私にマイクを向ける酔狂な人はいない…が、ひとりで質問してひとりでこたえようか。

先ず三角論を提唱してみよう

一、脳細胞を刺激するために文字を書き続けよう

一、適度の運動をして汗をかこう

一、恥をかく…恥をかくということは「いい年をして駄目…」と引っ込み思案にならずおしゃれをしてダンスにでも、また新しい異質の体験にでもどんどん挑戦して見ようということ。積極的な意欲が生き生きとした人生に通じようというものよし！　今年こそこの線でゆこう、春の足音がもうそこまで来ている。風邪などひいていられない。うーん、こんな時、ふと海を越えた遠隔地に住んでいる歌友に便りを…と思う。

＝しばらくぶりねぇ、お元気ですか。今でも短歌を勉強していますか？　先日ネェ、デパートであなたに似たうしろ姿を見かけ、うっかり声をかけるところでしたよ＝

座り机の前に座りコーヒーカップを片手に歌友の笑顔を思い出しつつ書く。現在のハガキは五〇円、「一銭五厘の時代から、ハガキ程安くて便利で楽しいものはない…」と、今は亡き父の持論であった。

私のハガキ入れの小箱には常に必要事項のために使うハガキは数十枚、たやすことはない。気軽に普段着のままの文章で書けるのはハガキのみ、封書だとちょっと普段着のままの文章では書けない。

仲良しの歌友のひとりは必ずといっていい程お便りの時には、小花を色鉛筆で美しく描き添えて下さる。すばらしく心のやさしい豊かなお人と常に思う。人の心というものは、僅かな心遣いでも向けられると、フーッと暖かいものが全身を流れ、すべて春色に和みゆくもの。

むつかしいこととは思うが、春四月の太陽に向かい私も暖かい心遣いをもちたい…と誓うのだった。

二番目の適度の運動とは…まあ十数年来、続けている個人レッスンものがひとつ、休まずがんばって続けよう。

それに月に幾度か…それぞれの友に送る書類があるので、郵便ポストまで行ったり来たり、まぁいくらか歩く運動のひとつにでもなろうかと思う。三番目の恥をかく…とは現在考え中。

異質の体験に挑戦することは？　現在模索中！

元気で生活できるうちは、まあ異質の体験も必要ではないかーと、ひとり納得し進んでゆきたい。

だが先日、「そろそろ杖を用意してみたら？」と歌友のひとりが電話で言う。

「折りたたみ式のいいのもあるから用意してみたら？」

とつけ加えられ親切な電話があった。ああー、そのような年齢になったのかなァーと一瞬、「淋しいねェ」と心の中で誰かがささやいた。

でもどう足掻いても仕方のないこと…と、ひとり淋しく納得したひと夜だった。

北ぐにの人々にとって唯一の華やぎは梅便りといえよう。今年は暖気のせいか海を越えた国からの花便りは早い。いつの日か「梅を見に来ないか」と、福岡に住む次男夫婦からの誘いに早々夫と出かけ、あの謂れのある天満宮の老木『飛梅』にそっと触れてみた思い出……。

いま思い出も新たに求めた紅白の梅の鉢が二個、日当たりのよいわが家のベランダに咲き誇っている。

―泣き笑いの―樺太漁場体験記

吉野慶一郎

あの日、昭和二十年八月十五日の終戦と同時にソ連の支配下となり、突然、敗戦という奈落の底に突き落とされて以来、闇の中でうごめいていた日本人に、樺太島民が待ちに待っていた引き揚げ開始という救いの陽光が差し込み、ようやく我に返った心地で喜び合い、町にも活気がよみがえりました。

引き揚げ開始の日程は判りませんでしたが、それは多分流氷の去る三月頃かと推測していました。それまでは健康に留意し、またソ連側とは無益なトラブルを避けるように努めることを考えました。何としても生きて帰ることが第一で、第二の故郷は幻となりました。

新年も明るく楽しい気分で迎え、大吹雪も酷寒も今は大して気にもならず辛抱できました。

しかし、そんな和やかな正月気分もつかの間、無情なソ連側から思いも寄らない通達が来ました。それは、「前年同様、今年も春ニシン漁を継続せよ。ただし漁場が終了したら引き揚げさせる」との条件つきです。

引き揚げが決定したこの期におよんでも、生産に深い関係のある日本人を最後の最後まで働かせるところが、ソ連流の強制労働です。激しい憤りと悔しさで目の前が真っ白になりましたが、ここが我慢のしどころと、残念ながら従うほかありませんでした。

早速、人を集め番屋を開く準備に入ります。昨年の切り揚げの際、もしやとこのような事態を予想して、鰊船や網、漁具一式は入念に保管した効果があり、修理などすることもなく、大して手数もかからずに準備を終え、番屋では安心してストーブを囲みながら毎日が楽しい引き揚げの話題が中心で、座談会のような気分で仕事を進めていました。

三月に入り流氷も去り、ゴメの群れも飛び交いようやく春らしい海になり、陸上の仕事から海の仕事へと移ります。

沖作業に必要な発動機船にも出陣してもらうことになり、機関部の整備を入念にし試運転も行って万全を期しました。今までスケソ漁をはじめ各漁業に、我が家の柱として活躍し支えてくれた第五十栄丸に期待するばかりです。

私が引き揚げの場合には、残念ながらこの船とも永久の別れとなるのは身を切られる思いです。これも引き揚げの裏の悲しい現実です。

この頃になって予想通り正式引き揚げの船の運行が開始され、真岡港の収容所には各地から続々と引揚者が集まり乗船の順番を待っていました。私の町からも、ソ連の職場や生産に直接影響しない人々から出発を始め、駅頭では先に行く人、後になる人々の見送りで賑い、それぞれ複雑な心境で挨拶を交わしながらも、やがては帰国できるという安堵の笑顔での光景が繰り広げられていました。

いよいよ漁の方も沖合い作業に入るので私も船に乗り組み、建網構造の実態を改めて勉強する最後の機会だと思い、土俵の型入れから建て込みに至るまで手伝いました。大安吉日に網卸祝いをやり、建て込みが終わると同時にニシンが「また来たゾー」とばかりに押し寄せ、浜は一挙に活気づき忙しくなりました。これにはソ連の兵士も出動し、笑顔でいろいろと仕事を応援してくれたので大助かりでした。

ニシン場後には引き揚げが決定している私たちには何の欲も無く、余り大漁して忙しい目に合いたくないという思いが本音でしたが、ニシンの好漁が続きます。

遠野の五百羅漢

瀧本　優子

五百羅漢成りたる因の飢餓さへや民話めかして遠野人らは
飢えに死す二千有余の化導せむ五百羅漢の面穏しかり
五百羅漢の近くを流るる水の音刻みし和尚の読経とひびく
涸沢の重なる岩に刻まれておほよそ苔むし姿わかたず
五百羅漢の中の一つの面あたり苔むして杉の実生の育つ
五百余の岩に刻まれ羅漢さま木洩日差してぬくとしゐます
餓死せるを供養せむ羅漢に詣でつつ難民が身に思ひ及びぬ
幼なきを口べらしとて石に打ち沈めし川と遠野古事記に
いくたびの氾濫伝へ猿ケ石川ととのふ堤に桜木つづく
娘を売りて貧しきくらし凌ぎしと遠野の里の昔むかしよ

私の漁場も責任割当量を突破していて、水揚げしたニシンは野村烝次郎さんが責任者をしている水産会社の大型タンクで塩蔵され、二、三日後にはソ連の貨物船に積み込まれ出荷されます。ソ連の重要な食糧となるのでしょう。

日本領土だった宝の島樺太の貴重な資源を、引き揚げ直前の日本人の手で漁獲、加工させ、そっくり本国へ運ぶ船の姿を見ていて、私も野村さんも言葉が出ませんでした。戦争の空しさだけがよみがえる反面、いつか憎っくきスターリンに天罰が下ることを神に祈るばかりでした。

漁業組合にソ連から特配される漁業用米の配給切符がまだ来ないので、その請求に行く用件を頼まれ漁業局へ行くことになりました。局長と交渉して、組合員全員の配給券を発行してもらい厚く礼を言って帰ろうとすると、

「吉野さんへ話があります。どうぞこちらへ―」

と別室へ案内されました。その真剣な顔を見ると何か不吉な予感が走りました。ニシン場に落度でもあったのか？　一瞬冷や汗が流れました。

―続く―

編集雑記

昭和二六年古平町史編さん室が設置され、その年、古平町弘報第一号も発行されました。それから五六年が経ち、計画していた古平町史全三巻の編さんもすでに終り、本年度を以って古平町史編さん室が閉鎖されることになります。それにともなって、町史編さんに関連して平成元年から発行していた『せたかむい』も廃刊となりますが、継続を要望される声もあり、また、多くの方から提供を受けた資料もかなり所蔵しておりますので、せっかくのそれらの資料を活用し広く提供したいということで、総務課所管として継続発行することになりました。内容につきましては何も変わりませんが、今回からタイトルを少し替えてみました。今後もご愛読のほどをお願い申しあげます。

短歌

古平岬短歌会

家族らしきトンビあまたも跳ねあそぶ秋澄む海辺の崖あたたかし　池田テル

暖冬と喜ぶことの許されぬ不気味な雨にたじろぎにけり　金子寿子

冬晴れの太陽ひと時そのめぐりをオーロラの如く明るめ輝く　坂本信子

雪の山いく片の雲うるみ見ゆ如月半ばの浜の夕暮れ　鈴木時子

店頭に並ぶ鰊見てこの年も暖冬の海の漁気にかかる　田中香苗

元気会のペットボトルのボーリング老いを忘れてはなやぐ歓声　丹後初江

九十年生きてすこやか百歳は大丈夫よと娘はいひくるる　東美知

海の方より吹きくる風は軒下を音たて巡る叫ぶごとくに　堀典子

俳句

古平俳句会

息止めて吹雪く真つ只中に立つ　越野清治

卸したる雪に埋もれて独り住む　斉藤波留

カーテンを細目にのぞく今朝の雪　山口悦子

薄氷に木樽の汁の被さりぬ　越野敏雄

飯鮨出来試食一日去年今年　大和田絵伊

春の川水は豊に泡立ちて　高橋重子

強風に岬は早くも冬枯れて　外山俊久

船の間に鳴る水音や春寒し　堀典子

神威沖根付く鮭の腹太し　本間寿昭

立つことを忘れてをりぬ春の闇　渡辺嘉之

冴返る潮鳴り遠く聴く夜かな　室谷弘子

昭和てふ時代を生きて雛飾る　仲谷比呂古

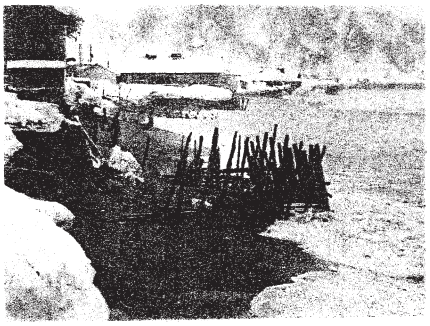
古平町史年表

昭和30年（1955）～続く

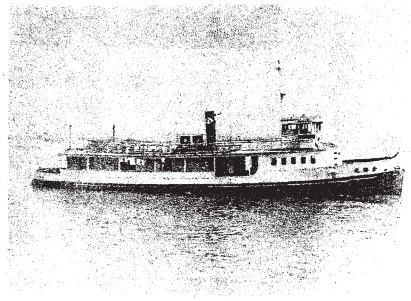
▲公有水面（古平漁港）埋め立てが承認され、入船町海岸から埋め立て工事が始まる
▲廻り淵橋と泥の木橋が竣功し、渡橋式が行われる
▲古平中学校体育館の落成式が行われる
▲沖村睦婦人会が結成される。会長上田文子が選出される

昭和31年（1956）

▲都市計画により西部地区の大字名・地番が変更になる。丸山町を分割し入船町の一部を編入して本町となる
▲北後志納税貯蓄組合連合会が結成される
▲古平漁業協同組合が超短波無線電話を設置する
▲雄冬タラ場で古平漁船の密漁が発覚して問題になる
★毎年浸食されてきていた浜町～港町海岸が、暴風雨と高潮により１㍍余りにわたって危険にさらされる（4／9）
▲出足平ワッカケ随道の掘削中崩落事故があり、須貝光雄（当時３０歳）が死亡する
▲内閣広報編集長片岡純治外が、スケソ漁取材のため来町する（のち広報に掲載される）
▲スケソ漁の操業を巡って底引き船との間に紛争が起きる
▲古平漁協総代会で、アワビ・ウニの３ヵ年間の禁漁を決定する
▲鰊模様と騒いだが沢江・歌棄の建網２か統で１００尾程度、その後群来村でもとれ、新聞では古平５石と報道されたが全道で１万石の漁獲があったという
▲農林省の適地適産を基調とした、新農山漁村建設綜合対策計画町村に古平町が指定される
▲余市定期航路に金盛丸が臨時に就航する
★定期船金勝丸が改装され、余市～古平間を４５分で航行する。（これは定期バスの約半分の所用時間である）
▲稲倉石に隣接する地区に㈱福岡商会が鉱山を開発し、山田菊次郎社長一行が来町し町理事者と懇談する
★北電による水稲の電熱温床についての講習会が開かれる。
★セタカムイ随道の竣功式が行われる
▲外地引揚者連盟古平支部が結成される。

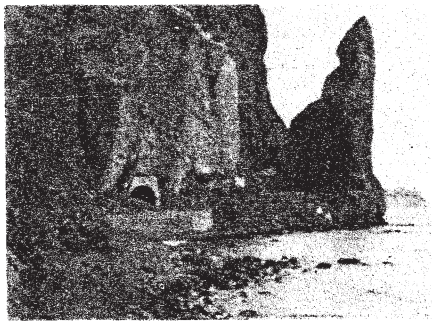


↑ 浸食が人家に迫る浜町海岸



↑ 高速を誇った定期船金勝丸

↑ 共同で設置された電熱温床



↑セタカムイ随道212m完成